

ツイキャス読書会 課題図書 遠藤周作『沈黙』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『Column Bar 信州 及び ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

(感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 13 回のツイキャス読書会の課題図書は、遠藤周作の『沈黙』（新潮文庫 他）です。

今回もたくさんの応募がありました。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます

映画版の予告は[こちら](#)です。

『沈黙』の感想文

遠藤周作の「沈黙」を初めて読んだ。この小説では16世紀半ばから17世紀前半にポルトガルのイエズス会から布教のために日本に渡航してきたが、政策が変わりキリスト教が禁止された後に、一転して迫害を受けることとなった宣教師たちと禁教後も「隠れ切支丹」としてキリスト教を信仰し続けた信徒たちの苦難が描かれている。

司祭ロドリゴはガルペとともに日本で拷問を受け棄教したと伝えられたかつての師フェレイラの安否を確かめることと、司祭を失い取り残された日本人の信徒たちの信仰を絶やさぬために命を賭して密航する。ロドリゴは信徒たちと合流するが、その後捕まり棄教を迫られ、自分が信仰を頑なに堅持するがゆえに殺され、穴吊りにされている信徒たちの呻き声を聞き、苦悩の末「転ぶ」ことになる。そのときロドリゴは絶えず心の中で「なぜこのような状況を見ていながら、あなたは沈黙を守っているのですか？」と繰り返し神に問いかける。

ロドリゴはキチジローに売られた自身を、ユダに金のために売られ十字架に張りつけられた基督の姿に重ね合わせる。裏切っては継りつくように追いかけて許しを乞うキチジローをユダに重ね合わせ、基督がどういう気持ちで「去れ、行きて汝のなすことをなせ」とユダに対して語ったのかという問いが切実に迫ってくる。

当初からロドリゴは十字架や聖画をせがんだり、基督よりも聖母のほうを崇めている、など日本人信徒たちの信仰に「彼等はなにか間違っているのではないだろうか」という違和感を抱いていた。フェレイラとの対話で「日本人が神の概念を理解できず、彼等流の屈折された神を崇拝する」、「基督教が日本に根付かない」と諭され、「正しい教えは普遍的に正しい（さらに言えばその教えを布教する自分は正しいことをしている）」というこれまでの人生をかけて培ってきた命題が根底から覆されていくことになる。その後ロドリゴは「転んだ」のだ。

「沈黙」という小説はキリスト教に対して残酷なまでに容赦のない問いを突きつける。この小説を読んで怖ろしいと思った。

(おわり)

『沈黙』 読書感想文 (小説版)

とにかく、『主よ、なぜあなたは沈黙されているのですか?』と、心の中で問うセリフが多く(キチジローでさえも)、後半である方から言葉をもらえた時は、救いがあったなあと思いました。(死に至る病でいう、ロドリゴの頭の中だけかもしれませんが、最後の最後まで信仰心があったからこそその心の声なのかもしれないですね。)

物語を読んでいるとロドリゴ自身が、肉体的な拷問は受けていないもののイエスが生きて死ぬまでのストーリーをなぞっているようにも思えました。

ユダ役としてキチジローを登場させ、あえて作者もそのように描いたと思われませんが。

作者は自分がキチジローだと書いているようですが、もし当時の環境にいたら誰もがキチジローになると思いました。

キチジローって、なんだか鬼太郎に出てくるネズミ男みたいだなあと思いました。

ずる賢くて、見た目も汚く、時に仲間であり、時には平気で裏切られる、だけど、鬼太郎は見離さずに困ったら助けてくれる。

キチジローが干し魚をロドリゴに食べさせ、喉を渴かせるための作戦のようだけど(ロドリゴが疑心暗鬼になっているだけ?)、それでも、パードレに生きて欲しいからあげたキチジローの優しさとして読ませてもらいました。

あと、キチジローはとてもロドリゴさんが個人的に好きというのが伝わりました。

ガルペだったら、同じパードレだとしても、あそこまでついていかなかったのかもしれませんがよね。(映画だと二人は同じパードレですが、かなり考え方が違いますし。)

ロドリゴの印象的なセリフは、『ユダが主、基督を売った値段は銀三十枚だった。私はその十倍の値をつけられている。』(P.113 ページ引用)というのがあり、イエスより高い値段がついた自分の価値に対して、お金の価値なんてくだらないという皮肉が感じられました。

後半の読みにくいクリシタン屋敷役人日記らへんは、あまり理解出来ませんでした。

(終わり)

『沈黙』 感想 ～ あの人 ～

私は何も知らなかったし、知ろうとしなかった。

現在住んでいる西日本には、隠れキリシタンの教会や処刑場跡が観光地化されているところが多い。切支丹の歴史渦巻く長崎の平戸や島根の乙女峠など、好んで出かけていった。この小説の読後なら理解できるのだが、とても山深いところに乙女峠はあり、教会は瓦を葺いていて、和風調だ。しかし、ひとたび教会に入るとステンドグラスの逆光に包まれて、とても美しい。以前の私は、なぜ教会が山奥にあるのか見た目が和風なのかに思いを巡らすことはなかった。お土産に安っぽいロザリオを嬉々として選び、山奥の美しい風景の絵葉書を買った。無知であることは言い訳にならない。私はこの小説を読んで、初めてこの地で流された血と叫び、そして「信仰」のことを思った。

自らの崇高な使命とフェレイラ教父の消息のために、二人の宣教師が日本の地に降りた。しかし、ロドリゴにとって死より辛い棄教と引き換えに、「あの人」の沈黙の意味を理解することになろうとは想像もしていなかっただろう。ひと思いに殉教していれば、辿り着くことのなかった境地だ。

自分の為に、「あの人」のために拷問にかけられる切支丹たちの苦しみに、自ら追い込まれるロドリゴ。しかし、本当の苦しみは「あの人」の真意が理解できないところにあったのだ。苦しみの前には祈りは何の力もなかった。

「あの人」は喜びを与えてくれるものではなく、苦しみを分かち合うために十字架を背負ったことを理解するために、ロドリゴは日本で大きな犠牲を払わざるをえなかった。

棄教したとされる井上筑後守は、基督教が日本には根付かないゆえに無駄な犠牲を払わせたくないと願っている一番敬虔な切支丹にみえた。宣教師さえ入ってこなければ、切支丹たちは根が腐り、ゆえに犠牲にもならない。ただ、やみくもに布教をする宣教師たちよりも現実的に農民たちのことを考えていたのかもしれない。たぶん、彼の心にはまだ「あの人」がいるのだろう。

棄教したフェレイラ、ロドリゴ、そして井上筑後守・・・大きな犠牲は払われたが「あの人」の真意に辿り着けてよかったのだと思うのは私の勝手な思いだろうか。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『神とは？』

ロドリゴにとってキリストは、「自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も清らかと信じたもの、最も人間の理想と夢に満たされたもの」(p268 5行)だった。

ロドリゴは、役人から長崎市中を引きまわされている時、基督がゴルゴダの丘までどんな表情を浮かべて十字架を背負っていったのか考えた。あるいはキチジローの裏切りに遭ったとき、基督ならユダを許したのか考えた。穴吊りにかけられた農民たちを前にして、基督なら棄教したかどうかと問うた。

答えて欲しいときにロドリゴが何度問いかけても、神は沈黙したままだった。

私はこの小説を読んで気づいた事がある。登場人物は、困難なとき、どうすべきかを神という第三者に問いかけながらも、結局は他でもなく自分自身に答えを問うている。そして、自分で答えを導き出している。

ということは、苦しいとき、神ではなく現存する誰か(人)に答えを問うと、道の選択を他人任せにしてしまうことになる。

本来人間は、自分の事は自分で決めたいものではないか。どんなに悩み苦しんでも、最終的に己の道は己で決めなければ納得できないのではないか。

しかし恐ろしいことに、穴吊りにされた農民たちは、とっくに「転んで」いるにも関わらず、ロドリゴが降参するまで解放されない運命にあった。ロドリゴがそれでも「転ば」なかったら、殺人者も同然だ。だがロドリゴは、フェレイラの説得がなければ恐らく折れなかつたろうと想像する。盟友ガルペと同様に、信徒を追って命を捨てていたかも知れない。

人に神を投影する事は、相手がどんなに清らかな人でもやがて限界にぶち当たるだろう。人が他者と全く同じ目線に立つのは無理だろうと私は思うからだ。しかし、フェレイラが説明する神は、誰であろうと寄り添い、同じ目線で、その人のために自分を差し出し犠牲になるのだ。

私は今回この小説を読み、宗教と神は関係がないのではないかと思った。神は私たちの心の中にあればよい。なぜなら神は他でもなく、神を経由して辿り着いた自分自身の意思なのだから。

だから、フェレイラもロドリゴも、棄教はしたが、決して神を捨てているのではないと私は感じた。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『この国は沼地だ』

あらゆる宗教は、「信じる」という頭の中にしか存在しないことと、現実での社会生活との折り合いをつけていく営みだ、と私は考える。誰かに何かを「信じる」ということを教えるのは非常に難しいことだ。ご利益があれば、見返りがあるならば、信じられるけれど、頭の中にしか存在しないこと、それでいて、沈黙しているものを一方的に信じることは、難しい。信じさせることはもっと難しい。その上、信じるのが、お上の意向と対立する場合には、なおさら困難だ。イエズス会の宣教師たちは、はるばる日本まで、頭の中にしか存在しない『神の概念』を「信じる」ことを、教えにきたわけである。モキチやイチゾウの死は、非常に気の毒であった。彼らが、辛い現世を耐えかえて、ひたすらに天国（ハライソ）を夢見ていたとしたら、それは、あの世でのご利益や見返りを信じていることになる。しかし、宣教師たちは、信じることを教えに来たわけで、彼ら、弱き者に天国を約束しに来たわけではない。宣教師たちは、なぜなら、天国を求めたり、聖母を崇めたり、十字架を欲しがる日本人信徒に不安をおぼえていた。ご利益や、美しさ、形あるものを求めるのは、信じることとは関係ないからである。偶像を信じることは、神を信じることとは何の関係ない。偶像を媒介しないで、どうやって、信じることを教えたらいいか宣教師たちは悩んだ。穴吊りの刑で、連帯責任を負わされて、棄教を迫られたとき、司祭ロドリゴは、はじめて、信じるとはなにか？ という問題を自分のこととして、切実に考えることになった。日本に来る以前の彼は、自分が信じたいものを、勝手に信じていただけである。棄教しても日本で生きていかなければいけないことこそが、「信じる」ことのスタートラインだった。そこには、キチジローはいた。彼のように、『神の概念』がわからないのにもかかわらず、信じている人と同じラインで司祭たちも信じていかなければならない。自然崇拝しかないこの沼地には、『神の概念』は、根づかない。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『沈黙』 感想文 (映画版)

とにかく原作に忠実だなあと感じました。

(サンタ・マルタがいなかったり、イチゾウ=じいさまになっていたりではありますが。)

ロドリゴさんが、後半になるにつれて、どんどんキリストに似ていきますよね。

原作でも、役人が飽きないようにするためか処刑の仕方にさまざまな種類があり、出だしの雲仙の熱湯がけ拷問～穴吊りの刑まで、とにかく自分が同じ日本人でありながら、日本人が嫌になるぐらい残酷なことをしているなあと少し暗い気持ちになりました。

キチジロー役の窪塚さん含め、メインの役者さんの演技は素晴らしかったですが、僕はモキチ役の塚本監督の信仰心の熱いキャラに熱いものを感じました。

水磔の刑シーンは、酷いしとても悲しかったです。

モニカ役の方の、不幸そうな表情も忘れられないです。

それと、映画版の神は、デウスではなくスコセッシ監督だなあと思いました。

ほんとうどの俳優が監督の為ならなんでもやります。という意気込みがあり、辛い拷問シーンでも役者の方からもっともっとという欲求で、監督が求めていなくてもみんな演技を死ぬ気で演じてくれたようなのです。

あと、音響効果がほぼ自然の環境音(波の音や蝉の鳴く音)しかないのに、物語の強さで魅せるし、長い上映時間も短く感じてしまうのも凄いと感じました。

最後の場面で、ロドリゴが火葬されるシーンで奥さんがキリストの十字架をさりげなく持たせていてくれたのが良かったです。

後半、フェレイラ(リアム・ニーソン)がジョージ・オーウェルの1984のビッグブラザーばりに、脳味噌プログラムを改変されて沢野さんとして登場したのはインパクトでかかったです。

キリスト教徒は本来、土葬ですが、日本人として火葬されるのも切なかったです。

体が無いと、世界の終わりの日に復活出来ませんよね。

映画館では、ラストシーン付近で、リアル穴吊りの刑をされているかと思うほど、鼻をかかれています方がいたのが残念でした。

原作、映画ともに『沈黙』は見る角度にも寄っては、キリシタンの信仰から植民地支配をさせない為に、処刑していたとも考えられますよね。

そして、宗教とはなにか、自分の使命とは何か、現代のキチジローとしての僕らの生き方(弱い者は、強い者に頼りがち。)など、いろいろな事を考えさせる力強い作品だと思いました。

(終わり)

『沈黙』 あらすじ (wiki より)

島原の乱が収束して間もないころ、イエズス会の高名な神学者であるクリストヴァン・フェレイラが、布教に赴いた日本での苛酷な弾圧に屈して、棄教したという報せがローマにもたらされた。フェレイラの弟子セバスチャン・ロドリゴとフランシス・ガルペは日本に潜入すべくマカオに立寄り、そこで軟弱な日本人キチジローと出会う。キチジローの案内で五島列島に潜入したロドリゴは隠れキリシタンたちに歓迎されるが、やがて長崎奉行所に追われる身となる。幕府に処刑され、殉教する信者たちを前に、ガルペは思わず彼らの元に駆け寄って命を落とす。ロドリゴはひたすら神の奇跡と勝利を祈るが、神は「沈黙」を通すのみであった。逃亡するロドリゴはやがてキチジローの裏切りで密告され、捕らえられる。連行されるロドリゴの行列を、泣きながら必死で追いかけるキチジローの姿がそこにあった。

長崎奉行所でロドリゴは棄教した師のフェレイラと出会い、さらにかつては自身も信者であった長崎奉行の井上筑後守との対話を通じて、日本人にとって果たしてキリスト教は意味を持つのかという命題を突きつけられる。奉行所の門前では、キチジローが何度も何度もロドリゴに会わせて欲しいと泣き叫んでは、追い返されている。ロドリゴはその彼に軽蔑しか感じない。

神の栄光に満ちた殉教を期待して牢につながれたロドリゴに夜半、フェレイラが語りかける。その説得を拒絶するロドリゴは、彼を悩ませていた遠くから響く鼾(いびき)のような音を止めてくれと叫ぶ。その言葉に驚いたフェレイラは、その声が鼾なぞではなく、拷問されている信者の声であること、その信者たちはすでに棄教を誓っているのに、ロドリゴが棄教しない限り許されないことを告げる。自分の信仰を守るのか、自らの棄教という犠牲によって、イエスの教えに従い苦しむ人々を救うべきなのか、究極のジレンマを突きつけられたロドリゴは、フェレイラが棄教したのも同じ理由であったことを知るに及んで、ついに踏絵を踏むことを受け入れる。

夜明けに、ロドリゴは奉行所の中庭で踏絵を踏むことになる。すり減った銅板に刻まれた「神」の顔に近づけた彼の足を襲う激しい痛み。そのとき踏絵のなかのイエスが「踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。」と語りかける。

こうして踏絵を踏み、敗北に打ちひしがれたロドリゴを、裏切ったキチジローが許しを求めて訪ねる。イエスは再び、今度はキチジローの顔を通してロドリゴに語りかける。「私は沈黙していたのではない。お前たちと共に苦しんでいたのだ」「弱いものが強いものよりも苦しまなかったと、誰が言えるのか?」

踏絵を踏むことで初めて自分の信じる神の教えの意味を理解したロドリゴは、自分が今でもこの国で最後に残ったキリシタン司祭であることを自覚する。

(おわり)

映画版の『沈黙 サイレンス』の感想

とにかく、塚本晋也さんの演じるモキチの水磔シーンがすごかった。

予告編でも最初に流れているが、大波をがんがん浴びて、おそろしい拷問である。しかし、あの拷問に耐えるモキチとイチゾウ、浜辺で見守るトモギ村の村人たち。信仰の無力さと、お上の弾圧の激しさが、対比されて描かれている。

私は、徳川幕府の弾圧の形式というのにも感心してしまった。封建制は形式である。井上筑後守演じるイッセ一尾形さん、通辞役の浅野忠信さんや、名前はわからないけど声の渋い、役人、奉行所のきれいな中庭、すべてが、形式でできている。「形だけ踏めば良い」という言葉にもあるが、日本は、形式の国なのである。すべてが、形式や儀式で進んでいって、それをみんなで守ることで統治されているのだ、というのをつくづく感じた。

あと、ロドリがが、五島の村に潜入するとき、スコセッシ監督が参考にしたという溝口健二監督の『[山椒太夫](#)』のシーンは、雰囲気が出ていてよかった。溝口健二の映画は、話としては退屈だが映像表現としては、ワンシーンワンカットが多用されていて緊張感の高い技術で撮影されている。ただ、長崎の街並みは、台湾でロケしたせいか、なんとなく違和感があった。あれは、日本じゃないよなあ、やっぱり。

片桐はいりさんの告悔のシーンが、やりすぎだとか、EXIKEのAKIRAの大根っぷりが目にあまるとかや、加瀬亮の首が飛んでいくシーンが滑稽なのとか、ところどころ、あれ？ って感じがした。キチジローを演じる窪塚洋介も、踏み絵を踏むたびにちょこちょこ小走りに駆けて消えていく演技以外は、あまり印象に残らなかった。

主演のアンドリュー・ガーフィールドと、フェレイラ役のリアム・ニーソンの対決は、この映画のハイライトなのだが、ここまで来るのにアンドリュー・ガーフィールドの苦悩する演技のパターンが出尽くした感があり、リアム・ニーソンの演技を受けきって新たな地平を切り開けていなかった気がした。

観て損はないのだが、期待したほどではなかった。原作読んでいなければ楽しめるかも。

(おわり)